Mail Tribune

2002.10.18.

シュナイダー美術館で作品を発表している角永和夫は、素材にそれ自体を語らせる

By BILL VARBL

木、紙、竹、ガラスにはそれぞれ内面の性質があると角永和夫は信じている。 56 歳の日本人アーティストが見ているように、彼の仕事は、彼らの内面の性質を浸透するほど、そのような素材から新しいものを作成することではありません。

角永の作品である「木、紙、竹、ガラス」が本日（10 月 18 日）アッシュランドのシュナイダー美術館にオープンします。

角永は、日本、ヨーロッパ、アメリカで、竹の断片から丸太の丸太、巨大なガラスの塊まで、さまざまな芸術作品を展示しています。 批評家は、彼の作品のラベルを作成するためにツールバッグの奥深くまで到達しました。 角永の芸術には、もの派と呼ばれる日本風の響きが含まれています。「一部の批評家は、彼の作品に日本の伝統的な自然に基づく宗教である神道の影響を見たと主張している。

通訳を務める妻・由美子（アドランドに展示に行った角永）に語りかけると、完成した作品の心構えを事前に立てていないとのこと。

「私は素材自体を機能させようとしています」と彼は言います。 「私は彼らが彼ら自身を探検するためのシステムを作ることに興味があります。」

芸術家の意志に合わせて形作られる空白のスレートとして資料を見るのではなく、明らかに固有の性質を持っているかのようにそれに近づきます。

「私はそれぞれの材料に対して 1 つの方法を見つけようとします」と彼は言います。 滴下によるガラス。 ...木を切ることで、これまでに見たことのない、または注意を払っていなかった新しい側面を見つけることができます。 ひび割れた木を見たことがあるかもしれませんが、実際には注意を払っていませんでした。」

時には、彼の大きな注がれたガラスの彫刻のように、かつてロマン派が自然のプロセスを尊重していたのと同じように、角永は産業プロセスを尊重していたかのようです。

角永はまだ20代で日本のアート界に飛び込んできた。 1973 年の有名なアーティストトゥデイエキシビションでは、彼を一般の人々や有名アーティストに紹介しました。 彼の家族の製材所で媒体として木に引き付けられ、彼は物理的および環境の変化に対する材料の反応に魅了されたと言います。

しかし、彼は高度な美学理論に惹かれていません。 時々、彼は木を見て、ログを見ますと言います。

1980 年代初頭までに、彼は紙のある県から別の県への移行を文書化していました。 彼の作品には、高さ 6 フィートまでの積み重ねられた一連の紙と、圧縮された紙のブロック、および膨らんだ紙の層が並んでいます。 まるで視聴者が
呼ばれるものの「成長」
呼ばれるものに「紙」
"本。"

角永の作品の成長、階層化、蓄積のテーマは、表裏一体の浸食、層間剥離、破壊という形でミックスされています。

角永は、丸太を積み重ねられた木製のシートに変えたり、焦げた丸太を灰に埋めたり、竹の棒の端を巨大なほうきにしたりします。 彼はかつて展示品にカイコの繭を使用していましたが、展示されている間に孵化し始めました。

彼の最近の作品の中には、トランがあります。

ガラスの半透明の緑のマウンド。注ぐのに 48 時間かかり、1 トン近くの重さがあります。

モンスターの球体が乾くまでに数か月かかり、SF 映画のように見えました。

「普通の資料をもう一度見ようと思います」と言葉を慎重に選びながら言います。「注意を払い、彼らが何であるかを見るために。」

彼の芸術は日本と西洋の芸術と生活の見方の違いを反映しているかもしれないと彼は言う。

はい、彼は素材の内面の性質を明らかにしたいと考えています。それは非常に東洋的な考え方かもしれません。 「しかし、私はそのようになるつもりはありませんでした。」 彼は言う。 「それはそのように起こりました。」

展示は 12 月 7 日まで継続されます。
シュナイダーは、アッシュランドにあるサザンオレゴン大学のキャンパスにあり、
午前 10 時から午後 4 時まで営業しています。
火曜日から土曜日、および月の最初の金曜日の午前 10 時から午後 7 時 詳細については、552-6245 に電話するか、次の URL にアクセスしてください www.sou.edu/sma。

776-4478 または電子メールで
記者のビルヴァーブルに連絡する
Brarble @ mailtribune、com